



NEWSLETTER

CENTER FOR SOUTHEAST ASIAN STUDIES, KYOTO UNIVERSITY

(2007年5月1日～2007年12月1日) No.57

- 2 **G-COEプログラム**
「生存基盤持続型の発展を目指す
地域研究拠点」がスタート
Global COE Program "In Search of Sustainable
Humanosphere in Asia and Africa" started
- 3 **連携シンポジウム「動きだしたグローバル COE プ
ログラム——地域研究の展開」**
Symposium in alliance with Global-COE programs on
area studies
- 4 **京都大学インドネシア同窓会 (HAKU)が発足、11
月総会開催**
Kyoto University Association of Indonesia (HAKU)
established with the general meeting in November
- 5 **ニーズ対応型地域研究推進事業**
「南アジア周縁地域の開発と環境保全」研究が選
ばれる
Need-Based Program for Global Area Studies
**第2回京大・東南アジアフォーラム、1月にバン
コクで開催**
The 2nd Kyoto University Southeast Asian Forum in
Bangkok, January 2008
- 6 **〈栄誉〉 Award Winners**
アジア太平洋研究賞 若手研究者が快挙
CSEAS junior research fellows monopolized the 6th Iue
Memorial Asia Pacific Research Award
- 7 **〈栄誉〉 Award Winner**
柴山教授が第2回モノづくり連携大賞特別賞受賞
Prof. Shibayama granted Special Award of the 2nd
Monozukuri Linkage Award
- 8 **東南アジアセミナー**
「時空間で地域を観る・解く・語る
——地域研究と空間情報科学」
Southeast Asia Seminar "Looking, Interpreting and
Talking about Areas from the Standpoint of Time and
Space: Area Studies and Space Informatics"
- 10 **拠点大学プログラム関連ワークショップ**
JSPS Core University-Related Workshops
- 11 **国際ワークショップ**
「地域情報学によるハノイの時空間分析」
International Workshop "Spatiotemporal Analysis of
Hanoi Using the Area Informatics Approach"
国際ワークショップ
「東アジアからみた東南アジア
——台湾と日本から」
International Workshop "East Asian Perspectives on
Southeast Asia: Taiwan and Japan in Focus"
- 12 **国立大学附置研究所・センター長会議**
第三部会人文・社会科学シンポジウム
Symposium by Institutions and Centers of National
Universities
〈連絡事務所だより〉
Letters from Liaison Offices
- 14 **尾池総長がジャワ島中部地震被災地を訪問、
復興支援を視察**
President Oike visited the CSEAS project site for
earthquake-stricken area in Yogyakarta, Indonesia
- 15 **〈東風南信〉 Reflections**
震災から「アジア太平洋研究賞」へ 阿部茂行
From the Earthquake to Asia Pacific Research Award
by Abe Shigeyuki
- 16 **人事**
Personnel
- 17 **Colloquia**
- 18 **Visitors' Views**
- 20 **〈海外疾病だより〉**
Getting Sick Here and There
- 22 **出版ニュース**
Publication News
- 23 **研究会報告**
Report on Seminars



G-COE プログラム

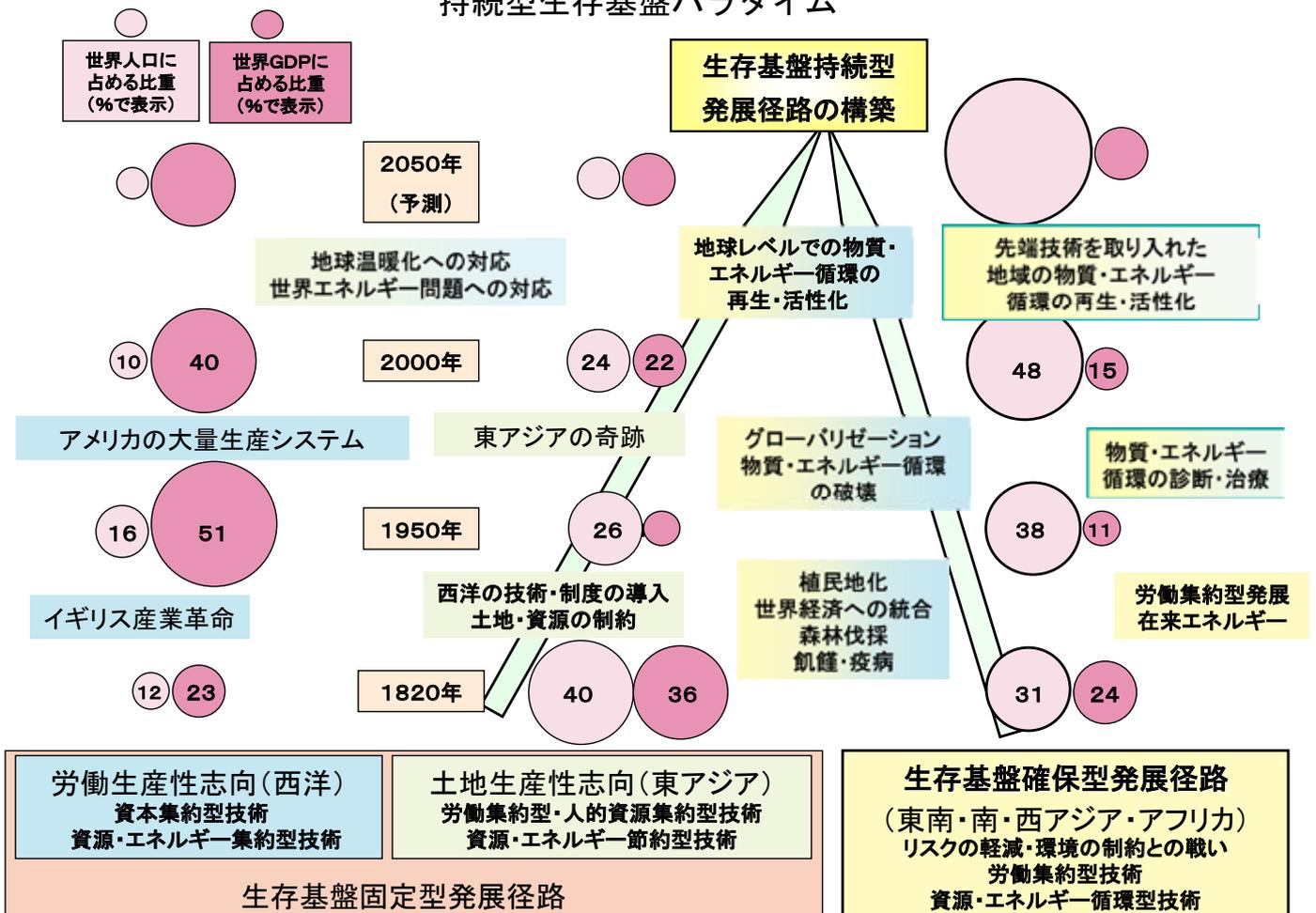
「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」がスタート

東南アジア研究所を主幹部局とするグローバル COE プログラムが 2007 年 7 月にスタートした。本プログラムは、グローバルで長期的な視野から、アジア・アフリカ地域の

持続的発展に関する学際的研究に多面的に取り組むものである。本研究所をはじめ、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、地域研究統合情報センター、アフリカ地域研究資料

センター、人文科学研究所の地域研究を志向する 5 つの部局と、生存圏研究所、生存基盤科学研究ユニット、大学院農学研究科（地域環境科学・応用生命科学・森林科学専攻）、大

持続型生存基盤パラダイム



学院工学研究科（電気工学専攻）のハード・サイエンスを志向する4つの部局が共同して、本格的な文理融合型研究を推進する。2012年3月までの5年弱の期間をかけて行われる。

言うまでもなく、フィールドワークにもとづく文理融合型の研究は京都大学の地域研究の得意芸である。本プログラムは、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科が本研究所と協力して行った21世紀COEプログラム（2002-07年）の成果を踏まえて、フィールドワークと臨地教育にもとづく大学院教育を継続する。

それと同時に、地域研究に携わる者と、先端技術の開発に関わる科学者との学問的対話を促進するために、「持続型生存基盤パラダイム」の形成を試みる。地球温暖化やエネルギー

問題のようなグローバルな問題がアジア・アフリカの地域社会へのどのような影響を及ぼすのかといった、緊急の課題を見据えながら、これまでの温帯中心の見方を相対化し、地域社会の持続的発展径路のあり方を追究するのがその目的である。森林科学・木質科学、気候学・大気圏科学、物質循環論、エネルギー科学など「サステナビリティ学」の専門家を加えて、地域研究における科学的研究の幅を広げていく。

大学院教育では、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科に「持続型生存基盤コース」を新設する。また、アジア・アフリカの研究現場とパラダイム研究をつなぐために、「環境・技術・制度の長期ダイナミクス研究」「人と自然の共生研究」「地域生存基

盤研究」「知的潜在力研究」の4つの研究イニシアティブを組織する。先駆的な研究の現場で大学院後期課程やポスドク研究員、助教を対象とした人材育成を集中的に行うことによって、これまでよりもはるかに幅広い、人文科学、社会科学、自然科学の諸分野にうじた地域研究の専門家や科学者を養成したいと考えている。

（文責：杉原 薫）



連携シンポジウム「動き出したグローバルCOEプログラム—地域研究の展開」

2007年11月11日、東北大学片平さくらホールにおいて、日本学术会议地域研究委員会と地域研究コンソーシアム、地域研究学会連絡協議会、東北大学東北アジア研究センターの共催による連携シンポジウム「動き出したグローバルCOEプログラム—地域研究の展開と研究教育体制の課題」が開催された。このシンポジウムは、今年度、「学際、複合、新領域」や「人文科学」分野において採択されたグローバルCOEプログラムのうち、地域研究に関連すると考えられるプログラムに呼びかけて実現したもので、以下の7つのプログラムが参加した。

「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」（東京外国語大学）

「コンフリクトの人文科学国際研究教育拠点」（大阪大学）

「文化創造と社会的包摂に向けた都市の再構築」（大阪市立大学）

「アジア視点の国際生態リスクマネジメント」（横浜国立大学）

「放射線健康リスク制御国際戦略拠点」（長崎大学）

「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」（京都大学）

「アジア地域統合のための世界的人材育成拠点」（早稲田大学）

東南アジア研究所が主管する「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」に関しては、拠点リーダーの杉原教授と事務局長の河野から、幅広い文理融合と長期的でグローバルな視野の獲得を通じた持続型生存



基盤パラダイムの創出という本プログラムの目的と、それを実現するための人材育成・研究体制に重点を置いた報告があった。

学内他部局と協力して学際的な研究や人材育成を推進することにより、大学を単位とした拠点形成を着実に進展させつつ、一方で、それによって必然的に生じる大学間の競争を超えて、関連する他大学のグローバルCOEプログラムとも研究課題や人材育成プログラムの共有を通じて連携を進め、より効果的で効率的な人材育成と研究を進めていきたいと思う。

（文責：河野 泰之）

京都大学インドネシア同窓会 (HAKU) が発足、11月総会開催



2007年11月26日に開催された第1回京大・東南アジアフォーラム



フォーラムの後の懇親会に懐かしい顔が見られた

2007年7月29日、京都大学ジャカルタ連絡事務所において京都大学インドネシア同窓会が発足した。海外初の京都大学同窓会にあたる。本同窓会のインドネシア語名称は Himpunan Alumni Kyoto University であり、通称はその頭文字をとって HAKU となった。HAKU というのは、漢字で博識・博学と書くときに使う「博」をも意味している。60人ほどの参加者が集って熱気にあふれるなか、尾池和夫総長から発足の祝辞をいただいた。初代会長にはボゴール農業大学のスピーアンディ・サビハム氏、副会長にはインドネシア科学院 (LIPI) のバンバン・スビヤント氏が着任し、暫定的ながら他の執行部メンバー、各地の責任者も決まった。彼らにとっては、インドネシア各地に点在する京都大学同窓生のリスト作りが重要な最初の仕事となった。HAKU も共催する形で第1回京大・東南アジアフォーラムを11月に開催することも決めた。

本年11月26日から27日にかけて、LIPI、HAKU、そしてグローバルCOEプログラム「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」(基幹部局: 東南アジア研究所) が共催する形で “In Search of New Paradigm on Sustainable Humanosphere” というテーマのフォーラムを開催した。参加費は10万ルピアと高めに設定したにもかかわらず、初日に140名ほどの参加者



東南アジアフォーラムで開会挨拶をする木谷雅人京大理事

があり、木谷雅人理事の開会挨拶で始まったフォーラムは大いに盛り上がった。初日の夕方には HAKU 年次総会が開催され、同窓会規約が決定し、毎年半ば頃に執行部会議を開催し、年末に年次総会及びセミナーを実施することが決まった。また、2年に一度は大きめの国際シンポジウムを開催すると同時に、レクリエーションを開催することとなった。

一般に、インドネシアでは少なくとも形式を整えるという点ではかなり迅速に組織作りは進む。上記の HAKU 総会までの流れを見れば分かるように、今回の HAKU についても同様で、組織名称、規約案、執行部などはすぐに出来た。問題はこれからの展開である。緩やかではあるが、HAKU が着実に形を整え、京都大学にとって貴重な東南アジア・ネットワークのハブの1つとなることを願ってやまない。

(文責: 岡本 正明)

「南アジア周縁地域の開発と環境保全」

研究が選ばれる

「南アジア周縁地域の開発と環境保全のための当事者参加による社会的ソフトウェア研究」(研究代表者 安藤和雄)が今年度の文科省「世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業」のひとつに選ばれた。期間は2007年10月から2010年3月までの2年6カ月。同事業は「グローバル・イシューに対応した新たな地域研究の可能性の探索」という研究コンセプトの下、2つの「グローバル・イシュー」(「開発等に伴う環境問題」または「人的移動に伴う社会問題」)のいずれかについて、「中央アジア」または「南アジア」を研究対象地域として、公募が行われた。

バングラデシュやネパールなどの南アジア周縁地域では、広大な農村地域の貧困が重要な問題となっており、限られた土地資源に対する巨大な人口圧力という形で顕在化している。資源に対する人口圧力の増大は、貧困の原因となるばかりでなく、深刻な環境問題をも発生させている。開発と環境保全の両立という現代の課題が、住民の「生存」を左右する抜き差しならない課題として重くのしかかっているのである。

この研究は、この課題に挑戦するため、現地NGOとの共同作業により、NGOや住民など当事者の社会的ニーズと、農村コミュニティー

や村人が個々に蓄積してきた経験的な知恵や知識を掘り起こして、分析と整理を行い、報告書ならびに参加型アクション研究計画にまとめることを目的として企画した。日本の南アジア地域に対する国際協力に貢献・活用できる「社会的ソフトウェア」を事例的に実践型地域研究の成果として提言する試みでもある。

従来の地域研究は「地域を研究する」姿勢が強かったのではないだろうか。問題設定は研究者側で設定され、研究者の関心や視点から、対象である地域で起きている現象を外的に分析していく、現象の理解が優先された研究である。一方、「開発等

に伴う環境問題」は開発と環境保全という二律背反事象の中に解決策を探ろうとする研究である。研究者の関心や視点である主観を一度否定し、問題に日々向き合っている地域の人々とNGOやODAなどの実践者とともに問題を再設定する。このように当事者性を強く意識した「地域で研究する」ことによって、出口の見えない解決困難な二律背反の現実の問題に挑戦していこうとする直観型地域研究を、新たな地域研究の可能性として追求する取り組みでもある。

(文責：安藤 和雄)

第2回京大・東南アジアフォーラム

1月バンコクで開催

2008年1月26日にバンコクにおいて第2回京大・東南アジアフォーラムが開催される。テーマは“Technology for the Future”

エネルギーとナノテクノロジーの

専門家2名が講義を行うほか、人間文化研究機構長石井米雄教授による「タイ社会とテクノロジー」と題する基調講演が予定されている。

フォーラムの後、京都大学同窓会

懇親会がバンコク連絡事務所において開催される。詳細は以下のとおり。

日時：2008年1月26日

13:00-16:20

場所：Queen's Park Hotel,
Bangkok

アジア太平洋研究賞 若手研究者が快挙



中西嘉宏氏（非常勤研究員）とオトマズギン・ニシム氏（研究員）の2作品が第6回井植記念・アジア太平洋研究賞に輝いた。また、遠藤環氏（G-COE 研究員）の作品が佳作に選ばれた。

本賞は、21世紀の世界に必要な新しい認識の創造を目指して2000年に設立されたアジア太平洋フォーラム・淡路会議によって、アジア太平洋地域に関する優れた人文・社会科学領域の博士課程論文を顕彰するために設けられたものである。今年第6回を迎え、全国から数多く寄せられた博士論文の中から、佳作を含めた3名の受賞者を東南アジア研究所所員が独占することとなった。



中西嘉宏氏

中西嘉宏氏の博士論文「ネー・ウィン体制期ビルマの政軍関係（1962-1988）」（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科学位申請論文）は、民主化する世界的な流れに反して40年以上にわたり軍事政権が続くビルマ（ミャンマー）で現地調査を行い、その調査結果に基づいて軍政の持続要因を軍と国家の関係から解明したものである。高い構想力による枠組の提示と、地道な実証の蓄積により軍政の実態を検証した研究成果が高く評価され、選考委員長である五百旗頭真・防衛大学学長は「本論文が英語で出版されれば、ただちにネー・ウィン体制期ビルマの政治分析として国際的標準になる」と選評を述べた。

オトマズギン・ニシム氏の博士論文“Regionalizing Culture: The Political Economy of Japanese Culture in East and Southeast Asia, 1988-2005”（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科学位申請論文）は、1980年代末から日本のポップカルチャーがアジアに進出していく過程を、ソウル、バンコク、

シンガポールなどでのフィールド調査によって明らかにした秀作である。既存の学問的枠組みにとらわれず、



オトマズギン・ニシム氏

「小泉元首相的センス」（選考委員長）をたよりに東アジア、東南アジアの都市を駆け回り、音楽産業、テレビ産業をはじめとしたメディア産業当業者へのインタビューなどにもとづいて、日本発のポップカルチャーが広くアジアで人気を獲得していくさまを分析した点が高く評価された。

遠藤環氏の博士論文「グローバル化時代のバンコクにおける構造変化とインフォーマル経済」（京都大学大学院経済学研究科学位申請論文）は、

グローバル化で変容するタイ・バン
コクのインフォーマル経済を、現地



遠藤 環 氏

コミュニティでの定着調査を通じ
て、主に職業と居住の側面から明ら
かにした力作である。前半部のバン
コクのダイナミズムを捉えたマクロ
分析と、後半部のフィールドワーク
を通して描かれた生き生きした都市
下層民の姿が、絶妙なバランスで組
み合わされており、その問題意識の
高さや地道な検証作業が高い評価を
受けた。

表彰式は、10月12日に神戸ポー
トピアホテルで執り行われた。受賞
の挨拶では、まず中西氏が「ビルマ
人に似た顔に産んでくれた両親に感

謝したい。おかげで内部情報をずい
ぶん得ることができた」と会場の笑
いを誘い、続いて、オトマズギン氏
がその流暢な日本語による丁寧な研
究紹介で授賞式参加者を深く頷かせた。
最後に、遠藤氏が調査地区を見舞っ
た火事と復興に汗を流す人々の様子
に触れながら、「今後もコミュニティ
の人たちと関係を育みながら研究を
続けていきたい」と抱負を語り、会
場は大きな拍手で3人の栄誉を称えた。

栄誉

Award Winners

柴山守教授が 第2回モノづくり連携大賞 特別賞を受賞



柴山守教授の『CD-ROM版くず
し字解読用例辞典』（山田奨治・柴山
守編、原著・児玉幸多編）が、第2
回モノづくり連携大賞の特別賞に輝
いた。

本賞は、日刊工業新聞社が主催し
て、科学技術・モノづくりのイノー
ベーションを実現する知財立国に向け
て、大学などアカデミックな機関の研
究成果を世の中に広く役立てる「知
の実用化」を図る目的で昨年度創設さ
れた。産学官連携に焦点を当て、注
目すべき事例とその創出にかかわっ
てきた人物やグループを対象に表彰
するもので、今年度は2回目にあたる。

柴山教授らは、約7年間にわたっ
て人工知能にもとづく近世古文書認
識の研究とくずし字解読支援システ
ム開発の研究を進めてきたが、この
たびの受賞はその研究成果がソフト
ウェアへの実用化と製品化に結実し
たことが高く評価されたものである。
このソフトウェアは、東京堂出版が
出版する児玉幸多編『くずし字解読
辞典毛筆版』と『くずし字用例辞典普
及版』をデジタル化したもので、両
辞典に収められたくずし字を統一的
に検索でき、また手書き文字認識で
検索できるという画期的な機能を備
えている。

これは柴山教授が長年携わってき
たタイ語三印法典コンピュータ総研
索引及びデータベース化を日本の近
世古文書認識に応用したとも言うべ
き研究成果で、地域研究が一見無関
係と思われる分野と繋がり、その発
展に寄与した好例である。今回の受
賞は、分野横断的な共同研究を積極
的に進めている当研究所にとっても
誠に喜ばしいことである。

表彰式は、11月28日に開催され
た「2007産学官技術交流フェア」
にて行われた。

東南アジアセミナー

「時空間で地域を観る・解く・語る ——地域研究と空間情報科学」

去る9月3日から7日にかけて、東南アジア研究所において毎年恒例の東南アジアセミナーが開催された。

東南アジアセミナーは、学内外の学部・大学院生、一般市民等を対象として、東南アジア研究所が開講している短期集中セミナーである。毎年、東南アジア研究者を中心に講師陣を揃え、各年のテーマに沿った切り口で東南アジアを読み解いてきた。セミナーが始まった1976年から数えて31回目となる今回のテーマは「時空間で地域を観る・解く・語る——地域研究と空間情報科学」。東南アジア研究所が構築を進めている地域情報学について学生や社会に発信することが狙いである。例年のテーマが東南アジアの人や自然・社会と密接に関係するものであったのに対し、今回は地域から一歩視点を引いた、地理情報システム（GIS）

やリモートセンシングをはじめとする「空間情報科学」と「地域研究」を融合させる方法論が中心的なテーマとなった。

こうしたテーマ設定に応じ、受講希望者も経営や経済、生態学、考古学など、東南アジア研究や地域研究とは異なる分野からの方々がむしろ多数を占めた。各講義に対する質疑応答や総合討論の場における議論は、受講者の関心や専門分野の多様さを反映して非常に幅広く厚みがあり、地域情報学に対しても多くの分野・立場からの提案がなされるなど、主催者側にも大変有意義であった。またこのほかに、東南アジアや地域研究に縁の無かった方々がそれらに興味を持つようになるという思わぬ成果もあったことも書き加えておく。

期間中3回にわたってGISおよびリモートセンシングの実習時間を設

けたのも本年の東南アジアセミナーの特徴である。受講者のGISおよびリモートセンシングにおける経験が非常に幅広くばらついていたため実習の難易度設定に苦慮したが、ふたを開けてみれば参加者全員に熱心に取り組んでもらうことができ、セミナー後に実施したアンケートでもかなり高い評価を得た。

例年通り受講者同士の交流が活発であり、現在、本年のセミナー受講者の中で地域情報学に関する情報交換の場を設けようという動きが出ている。これも今回の大きな成果といえよう。

セミナー終了後に受講者から寄せられた感想文は、いずれも主催者にとって非常に示唆に富むものであった。その中から2つをご紹介します。

（文責：星川 圭介）



地域情報学の今後の可能性

私は GIS の利用やシステム及びアプリケーション開発に関して、新たな視点・方法論などを得られるのではないかと本セミナーを受講したが、ここでは想像していた以上に多くの視点・方法論に触れることができ、結果として自分の持っていた視野を大きく広げることができた。もともと GIS の可能性については非常に大きなものを感じていたが、それは一般的に広く知られているサービスや、自分の携わる業務に関するものであり、その考え方や視野は狭かったように思う。人文・社会学や自然科学、考古学など様々な分野における具体的な GIS やリモートセンシングの利用や応用・考え方を知ることができた。また、各分野における調査・研究のアプローチ手法に関しても初めて知ることが多く、見識が広

がったように思う。多くの講師の方々や一部の受講生によるフィールドワークや現地体験の紹介は非常におもしろく、私は現地を全く知らなかったので大きな興味を持った。今後機会があれば、東南アジアを含め世界に足を伸ばし、自分にとって未知の文化や人々に触れてみたいと思う。

地域情報学は非常に幅の広い分野を対象にしており、地域研究としてフィールドワークで現地調査しなければ見えないものと、情報技術の GIS やリモートセンシングを用いなければ見えないものがあり、それらを組合せれば新たなものが見えてくることがわかった。そして、情報技術はそれらを横断的に分析・解析・可視化するための一つのツールであることを再認識した。今後、セミナーで紹介されたような

4次元で地域情報を扱う考え方が GIS に実装され、それに伴うデータが整備されていくことで、地域情報学としての新たな発見・理解につながることに期待したいし、自分もそれに関わっていきたく考えた。

本セミナーでは講義だけではなく、自分の分野とは別の分野で研究に邁進されている方々と議論や交流することができ、お互いに多くの刺激を受けられたと思う。今後の自分の研究においても役立つ発想を得る貴重な経験となったと思う。

香川 正和
大阪市立大学創造都市研究科/財団法人
大阪市水道事業サービス協会



東南アジアセミナーに参加して

近年 GIS や RS を駆使した研究が様々な分野で取り上げられています。そういったことをふまえて東南アジア諸国の地域研究とは一体どのようなものか? という興味を持って今回のセミナーに参加させていただきました。講義では情報学の定義に始まり、東南アジア諸国での最先端の地域研究手法とその可能性・限界について紹介されました。

地域研究に情報技術を取り込むという発想の下に、更に情報の共有化、地域参加型の“地域情報学”という新しい形の学問が形成されつつある、ということが事例を交え、詳しく説明され、大変興味深く聞くことができました。

この“地域情報学”が発展する為に必要な基盤の整備を進めようという活動が一つの研究室、地域に止まらず、日本の他の地点でも時を同じくして起

こっているという事実は、今まさに地域研究が新しい段階に移行しつつある、ということを示唆しているように思えます。そのような学問の進展の節目に当たり、5日間で全てを学び取ることは不可能ではありますが、その動向に焦点を絞った東南アジアセミナーは大変充実したものでありました。

今回のセミナーでもう一つ特筆しておきたいことは、講義の内容に沿った実習が行われたということです。実習時間は長くはないものの、丁寧に初心者にもわかりやすく、研究中に具体的にどのような作業が行われているかを体験することによって、講義での理解を助けられました。もう少し実習時間が長くてもよかったのではないかと、つい欲が出てしまう程興味深いものでした。

本セミナー中、折に触れ感じたこ

とは、コンピュータによって標準化された解析、分析は地域研究の発展に大きく貢献することは間違いないものの、従来型の時間をかけた地域との交流を通じた情報収集や、人の手による情報の処理によって初めて形になるものだという事です。5日間の短い間でしたが東南アジア諸国の地域研究を垣間見る良い機会になりました。このセミナーを機に東南アジアに関しての知識を身につけていきたいと思えます。最後に、何よりも、講義された先生方の研究に対する熱意が伝わってくるのが印象的なセミナーでした。

河合 潮
京都大学理学研究科



International Workshop “Security and Violence in Contemporary Southeast Asia”

2007年7月18、19日、タイのチェンライにおいて拠点大学交流事業の一環として「現代東南アジアにおけるセキュリティと暴力」と題する国際ワークショップを開催した。このワークショップは同年2月にバンコクで開催したワークショップをさらに発展させるためのものであり、参加者全員が2月のペーパーを改訂したものを事前に用意して、その中身を議論することに力点が置かれた。ワークリット氏はタイのクーデターの背景を政治経済的に分析し、ポーンピボン氏と中西氏は

ミャンマーの長期軍政を異なる視点から分析して見せた。本名氏は民主化後のインドネシアのセキュリティー・セクター改革の動向を発表した。続くセッションでは、ビエンラット氏がタイの地方レベルでの政治と暴力の関係を、岡本がインドネシアで台頭しつつある民間セキュリティー・プロバイダーについて発表を行い、水野氏がインドネシア・ジャカルタの夜警団の史の変遷を振り返った。最後のセッションでは、まず、イスラームの過激派のネットワークについて見市氏が発表し

た。その後、タネート氏がムスリム住民と中央政府との対立が続くタイ南部の分析を行い、紛争の絶えないと思われるフィリピン南部の「平穏さ」についてアビナーレス氏が発表した。そしてイクラルル氏が、インドネシアのアチェでは法的には紛争は終焉したものの、火種は消えていないことを指摘した。国家、そして非国家主体による暴力の東南アジアの様相を中央から地方に至って包括的に理解するという本ワークショップの企図は十分に果たした内容であった。(文責：岡本 正明)

▼現代東南アジアにおけるセキュリティと暴力



▼現代東南アジアにおけるセキュリティと暴力



“Families in Flux: Southeast Asian Families across Borders and Categories” at the Fifth ICAS Conference

クアラルンプールにて、第5回アジア研究者国際会議 (International Convention of Asian Scholars, 2007年8月2-5日) が開催された。ICASはオランダのIIAS (国際アジア研究所) が事務局を勤める会議である。今回はマレーシア国立大学がホストとなり、人文・社会系を中心として世界中からアジア研究者が2千人規模で集った。我々は、「東南アジアにおける流動する家族」“Families in Flux: Southeast

Asian Families Across Borders and Categories” と題したパネルで参加した。いずれも拠点大学交流事業「変貌する『家族』」メンバーにより、東南アジアにおける家族の動態について、歴史資料、政治学的研究、民族誌的研究などから考察し、共同研究の目的とともに紹介した。内容は、いずれもマテリアルに密着した議論だったが、共同研究の完成に向けてそれぞれに課題を明らかにすることができた。

今回初めて参加してみたICASは、組織も運営も緩やかで、行ってみたらあるはずのパネルがキャンセル、というような事態もある一方、アジア各国や欧米のいろいろな研究者に気軽に会える場であった。各国の研究機関やプロジェクトベースのパネルも多数あり、東南アジア研究所から、今後も積極的なパネルや発表の参加ができる場である。

(文責：速水 洋子)

International Workshop “Spatiotemporal Analysis of Hanoi Using the Area Informatics Approach”

国際ワークショップ「地域情報学によるハノイの時空間分析」が、去る9月13日ベトナム国家大学(ハノイ)で開催された。主催は基盤研究(S)「地域情報学の創出—東南アジア地域を中心に—」のハノイ・プロジェクト及びJVGC日本ベトナム空間情報学コンソーシアムである。テーマは「歴史研究と地質学の視点からみるハノイの都市形成」であった。日本からは、東南アジア研究所水野広祐所長の挨拶に続き、桜井由躬雄東大名誉教授によ

るハノイ4次元時空間による歴史分析、米澤剛研究員によるハノイ3次元地形分析の報告があった。またハノイ鉱山地質大学からは、タン・ヴァン・アン講師による地形の標高計測と地盤沈下の動向、パム・クイ・ナン講師らによる地下水調査と地下構造に関する最近の研究結果が報告された。

本ワークショップは、ベトナム国家大学と京都大学の学術交流包括協定締結の調印式と同時に開催されたもので、東南アジア研究所のベトナムにおける

研究活動を学内外に広く公開する機会ともなった。本調印式に参加した尾池和夫総長からは激励のことばとともに、飛び入りでアジア圏における地震発生状況とメカニズムについて報告をいただいた。またベトナム国家大学マイ・ヌアン副学長からも持続的発展を目指すハノイの都市開発についての緊急報告があった。これにより参加者約50名による討論が一層盛り上がることとなった。

(文責：柴山 守)

▼地域情報学によるハノイの時空間分析

▼地域情報学によるハノイの時空間分析



▲東アジアからみた東南アジア

International Workshop “East Asian Perspectives on Southeast Asia: Taiwan and Japan in Focus”

去る9月19、20日に、Center for Asia-Pacific Area Studies, RCHSS, Academia Sinica(中央研究院人社中心亞太區域研究專題中心)と京都大学東南アジア研究所との共催によるシンポジウム“East Asian Perspectives on Southeast Asia: Taiwan and Japan in Focus”が、台北・上記亞太區域研究專題中心にて開催された。2日間のプログラムは次の通りである。

9月19日
第1セッション：
Interstate Relations in Colonial Mainland Southeast Asia Focusing on Siam

第2セッション：
Democratization against/for State/Non-State Violence in the Philippines and Indonesia

第3セッション：
Islamic Discourse in Malaysia and Islam Music/Rituals in Indonesia

9月20日
第4セッション：

Present State of Southeast Asian Studies in Taiwan and Japan

第5セッション：
History of Commodity Trade in Nanyang and Business Organization Leadership in Southeast and East Asia

暖かい歓迎の下、双方の東南アジア研究の現状を知り専門的な知見を交換することができ、有益な2日間であった。来年度は9月半ばに京都にて開催される。(文責：小泉 順子)

第三部会（人文・社会科学）

シンポジウム 11 月開催

今年のテーマは「さまざまなイスラーム アジア・アフリカ研究の現場から」であり、11月1日午前9時半から午後1時まで東京外国語大学本部管理棟大会議室で開催された。今回のシンポジウムの目的は、イスラーム＝テロといった誤謬を認めず、13億人いるムスリムについて、その政治なり社会なり価値観を地域研究者たちが開示してみせることであった。水野広祐が司会役を務め、大塚和夫氏（東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所所長）が開会挨拶を行った。

まず、飯塚正人氏（同研究所）が「ア

ラブにとってイスラームとは何か」というタイトルの発表を行い、アラブとイスラームとの興味深い関係を分かりやすく説明した。続いて、森本一夫氏（東京大学東洋文化研究所）が「シーア派からみたイスラーム史」というテーマで、イスラーム少数派のシーア派の視点からイスラームの多様性を示した。岡本正明は「東南アジアにおけるイスラーム主義、その多様性——テロ、紛争、そして選挙政治」というテーマで、主にインドネシアにおけるイスラーム主義の最近の展開について発表した。帯谷知可氏（京都大学地域研究統合情報

センター）が「中央アジアのイスラーム——ロシア・ソ連との関わりから」というテーマでアッラーを信じながらも世俗的生活を送る者の多いウズベキスタンの政治社会状況を歴史的に説明した。その後、黒崎卓氏（一橋大学経済研究所）からはイスラーム金融に関わるコメント、長縄宣博氏（北海道大学スラブ研究センター）からは国家・社会関係におけるイスラームについてのコメントがあった。会場は満席で聴衆の方々はときには冗談も混じる報告に熱心に耳を傾けていた。

（文責：岡本 正明）

連絡事務所だより

Letters from Liaison Offices

色彩の氾濫・黄色の洪水

念願かなって、9月19日からバンコク連絡事務所に来ております。今までは、もっぱらフィリピンで文化人類学の調査研究をしてきました。生まれて初めてのタイです。言葉が分からず、情報や刺激はもっぱら目から入ってきます。そのせいか街の

第一印象は、色彩があふれかえっていることでした。有名ブランド店が入る洒落たモールがある一方で、道沿いには屋台が並んでいます。街全体がごちゃごちゃ雑然としている点はマニラとさして変わりません。でも、タクシーが原色の目立つ色をし

ているのにはびっくりしました。赤、青、黄、紫、オレンジ、ショッキング・ピンク、何でもアリです。確かにどこの国でも、タクシーは目立つ色をしています。でも、色のバラエティと鮮やかさでは、バンコクが一番でしょう。なんだか、いつも街は

清水 展

カーニバルといった雰囲気です。

もうひとつ目立つのは、黄色のTシャツ、Yシャツ、ポロシャツです。毎日ですが、とりわけ月曜日には、男も女も黒いパンツに黄色のシャツです。なんだかタイの国民服みたいです。このように多くの人々が頻繁に黄色を着るようになったのは、昨年6月に国王の在位60周年を祝った頃からだそうです。そう聞くと、黄色を着ることで、国王への

敬愛の念を一人ひとりが示しているのか、と小さな感動を覚えます。街中のそこかしこに国王の肖像画が掲げられおり、それらも黄色と金色で光輝いています。

フィリピンでも、今から20年以上も前、街じゅうに黄色が溢れました。それは、1983年に亡命先のアメリカから帰国し、マニラ空港でタラップから降りるところを暗殺されたニノイ・アキノへの共感と共苦、そして

マルコス独裁政権への不支持の意思表示でした。未亡人のコラソン夫人が、1986年の繰上げ大統領選挙に立候補して当選したとき、黒の喪服を脱ぎ捨てて黄色の勝負服を常に着ましたし、支持者たちも皆、黄色のTシャツでした。国王への敬愛の念と、独裁者への異議申し立て。まったく同じ種類の黄色なのに、両国では意味が逆転です。

(研究所教授)



連絡事務所だより

Letters from Liaison Offices

ジャカルタを捨てる？

雨期に入ったジャカルタは最近決まって午後には強い雨が降る。事務所の前は花屋が並び、その裏手の道路の縁には販売用の植木が並んでいる。歩いていると紫陽花が目にとまり、ジャカルタでも雨期には紫陽花かとあらためて気がつく。

あまりにも日々のこととなり、誰も口にもしないジャカルタの渋滞は、雨期とともにテレビに登場する。たちまちのうちに川と化す道路に車はあふれかえり、それでも通らなければならない運転手は神頼みをするばかりだ。ひとたび動かなければ、財産である車は取り返しのつかないことになる。

進められつつある専用バスレーンの工事とその可否が渋滞をさらなる

論争に導く。工事そのものが渋滞を深め、バス専用にしたばかりに一般車の車線がへり、結局渋滞はひどくなるのではないか。それでもやはり庶民の足は確保しなければならないという賛成派の声は、まったく動かない車の姿に押されぎみである。挙句のはてに、問題は専用バスレーン問題への賛否ではなく、根本的に全道路の面積よりも多いとされる車の量そのものであり、だとすればジャカルタを捨てるべきではないか。こうして、雨期にはいったジャカルタのメディアは首都遷都論を伝えるのである。

渋滞の車のなかで人々はおしゃべりをする他ない。同乗者のいない運転手は携帯を使う。この事務所に来

て渋滞が気にならないのは、運転手氏とおしゃべりができるからである。彼は慎重かつ正確かつユーモアに満ちた人間と社会の観察者である。自身の生き残りをかけた経験から治安がどのように保たれているのかを綿密に語り、無法地帯に秩序が存在する理由がわかる。事務所に赴任した人間も次々と彼の事例となり、こまかい観察と彼独自の意見が披瀝される。私自身もこうして観察されているのだと気にならないこともないが、渋滞なのだから仕方がないと諦めにかわり、強い雨だけは降らないでほしいと願いながら、次のインタビューの相手のもとへと赴くのである。

(研究所客員教授)



尾池総長がジャワ島 中部地震被災地を訪問、 復興支援を視察

東南アジア研究所は2006年5月27日のジャワ島中部地震発生直後から浜元聡子研究員を中心として復興支援活動を行ってきた。ジョグジャカルタ近郊のゲシアン村に被災住民の癒しの場としてのブカランガン（屋敷林）を整備したのに加え、本年度は同じゲシアン村に、住民たちが地震発生メカニズムや地震等の災害への対処法を学習するための施設

として防災情報拠点を立ち上げた。地図や地理模型など、まずは村の周辺地理から理解できるような教材も展示されているほか、子供たちが防災情報を自ずと身につけられるよう、絵本やぬいぐるみ等を配した児童用スペースを設けているのがこの施設の特徴である。地震学を専門とする尾池総長がこれら一連の活動に高い関心を示し、本年7月25日、総長

によるゲシアン村視察が実現した。

当日はインドネシア研究者である水野所長がゲシアン村周辺の自然や文化、震災後の人々の対応などについて解説しながら総長を案内。防災情報拠点では浜元研究員がゲシアン村における東南アジア研究所の活動を紹介した。現在、防災情報拠点の整備活動は十分とはいえない予算の中で行われているが、そうした中で村の人々は防災情報拠点を自分たちの施設と捉え、有形無形にその整備活動を支えている。研究者が地域の人々との共同で何かを創り上げ、その過程において地域に対する知見を深化させる。ゲシアン村における活動は地域研究の新たな領域を拓くものであり、今回、その成果を総長に示せたことは村人たちの誇りとなっている。（文責：星川 圭介）

秋からスタートした科研費プロジェクト

■若手研究（スタートアップ）

東南アジアにおける社会革命と社会的結合の変化・持続——カンボジア農村を中心として
研究代表者：小林 知

■特別研究促進

台頭するミャンマー華僑・華人実業家の基礎研究
研究代表者：中西嘉宏

■特別研究促進

グローバル化時代のインフォーマル経済とバリューチェーン
研究代表者：遠藤 環

震災から 「アジア太平洋研究賞」へ

阿部茂行

「アジア太平洋研究賞」の存在は大学院生の間でかなり知られるようになった。これはアジア太平洋地域に関する日本人及び留学生による人文・社会科学領域の博士論文を審査対象とする2001年に始まった若い顕彰事業である。賞金が100万円と高額で、水野所長が2000年にもらった発展途上国研究奨励賞が50万円であることを考えると、まだスタートラインに立ったばかりの研究者を顕彰する賞としては破格であろう。若い研究者ほど研究費が足りないから、少しでも研究の足しになるようにとの配慮がそこにある。

この種の賞が他に存在せず、賞金が高額であることが、年ごとに応募者が増えてきている理由はある程度説明できる。だが本当の理由は、受賞論文の質が高く、かつ受賞者が各方面で活躍し始め、世間がこの賞を若手研究者の登竜門と認識し始めたことにある。この賞の第1回受賞者は陳天璽と見市建、第2回は青山和佳、菅原由美、包慕萍の3名。第3回は中島岳志、玄大松、第4回と第5回は1名のみで猪口真大と樋渡雅人であった。そして今年の第6回は東南アジア研究所がこの賞を独占した。非常勤研究員の中西嘉宏とオトマズギン・ニシムが受賞、遠藤環は惜しくも次点の佳作であった。中西はこれまで誰も手をつけてこなかったビルマの政治史を丹念な現地調査を素材に緻密な論考を重ね、すばらしい論文に仕上げた。ニシムは現地レポーターさながらのバイタリティーで日本のポップカルチャーのアジアへの広がりを現地調査し、読み手をうならせる興味深

い論文を著した。遠藤はバンコクのスラム社会における職の変遷を丁寧に調べ上げ、これまでにない未組織職業の実態をあきらかにした。授賞式での3人のプレゼンテーションは、若い研究者がここまでやれるものかとの思いを出席者に抱かせるに十分であった。

さて、この「アジア太平洋研究賞」というのはアジア太平洋フォーラム・淡路会議の活動の一つである。この会議は阪神淡路大震災後の記念事業として組織されたもので、アジア太平洋地域の多様な文化が共生する新たなアジア太平洋のビジョンを明らかにする必要から、国際シンポジウムやフォーラムを開催し、その実現に向けて「淡路会議声明」として、広く社会に政策提案を行ってきている。この活動の一環が顕彰事業で、井植記念「アジア太平洋文化賞」及び「アジア太平洋研究賞」なのである。前者は、文化的・社会的な実践活動を通じて、この地域の国際交流や地域発展に顕著な貢献をした個人または団体に対して500万円を贈呈してきている。これまでの受賞者はタイの建築家ピンヨ・スワンキリ、カンボジアでデジタル・ディバイドに取り組んできたバーナード・クリッシャー、日本の国際交流に尽力した山本正、東南アジア研究で着実な業績を残してきたルース・マクベイ、農業技術のトランスファーに功績著しいアジア学院であった。そして今年は「緑の革命」とその後の環境政策に功績のあったフィリピンの国際稲研究所 (IRRI) が受賞した。顕彰事業が井植記念とあるのは、三洋電機元会長の井植敏が淡路会議代

表理事をつとめ、創業者である故井植歳男氏を記念した(財)井植記念会を通じてこの事業を兵庫県とともに支援しているからである。

淡路会議の活動は、アジア太平洋地域の文化・社会・政治・経済の理解に非常に役に立っており、「共生」という標語がまさにぴったりあてはまると感じるがゆえに、私は研究会委員として淡路会議の事業に創設以来関わってきた。顕彰事業の研究賞に関しては学生の皆さんにはどんどん応募していただきたい。文化賞に関しては賞にふさわしい人の推薦を是非ともお願いしたい。毎夏の国際シンポジウム・フォーラムにはいつも大きな知的刺激を受ける。2日間という短いものであるが、淡路島でのバケーション気分も素晴らしく、私にとって今や欠かすことのできない年中行事となっている。これにも是非参加していただきたい。このメッセージとともに、東南アジア研究所に在籍したものとして、今回の中西、ニシム、遠藤のアジア太平洋研究賞独占は心底誇らしく、一筆書かずにはおれなかったことをここに白状したい。

中西さん、ニシムさん、そして遠藤さん、アジア太平洋研究賞おめでとうございました。(文中、敬称略)



同志社大学政策学部教授
(1998-2004 東南ア研教授)

人事

教員人事

<新任>

生方 史数 助教 (G-COE)

(2007年10月1日付)

1995年京都大学農学部農林経済学科卒。2002年同大学院博士後期課程修了(同年同大学博士号取得)。02年京都大学東南アジア研究センター非常勤研究員、03年同センター日本学術振興会特別研究員(PD)、06年京都大学東南アジア研究所研究員(科学研究)。

[主要論文]

▽ Forest Sustainability and the Free Trade of Forest Products: Cases from Southeast Asia. *Ecological Economics* 50(1-2), 2004. (Shimamoto, M., Seki, Y. と共著) ▽ 「プランテーションと農家林業の狭間で——タイにおけるパルプ産業のジレンマ」『アジア研究』53(2), 2007. ▽ 「コモンズにおける集合行為の2つの解釈とその相互補完性」『国際開発研究』16(1), 2007.

<昇任>

Patricio Nunez Abinales 政治経済関連研究部門准教授は2007年9月1日付け、教授に昇任。

外国人研究者人事

◆外国人研究員

Khin Lay Swe (ミャンマー連邦)。イェジン農業大学農業植物学科教授。2007年7月1日～9月30日。「ミャンマーの多様な農業生態地域における作付体系の発展」

Ikrar Nusa Bhakti (インドネシア共和国)。インドネシア科学院研究員。2007年7月1日～12月31日。「アチェーヘルシンキ合意以降——アチェ紛争平和的解決に関する研究」

Eric S. Tagliacozzo (アメリカ合衆国)。コーネル大学歴史学部准教授。2007年8月1日～2008年1月31日。「東南アジアからのメッカ巡礼の歴史」

Sauliah Saleh (インドネシア共和国)。インドネシア国立図書館目録部門部長。2007年10月1日～2008年3月31日。「インドネシアと日本における納本制度の比較」



Nguyen Thi Xuan Binh (ベトナム社会主義共和国)。国立科学技術情報センター情報活動促進部門シニア研究員。2007年10月1日～2008年3月31日。「ベトナムにおける農学に関する書誌目録の編纂」



Ho Dinh Duan (ベトナム社会主義共和国)。ベトナム科学技術院物理学研究所ホーチミン・首席研究員。2007年10月1日～2008年3月31日。「GIS/RSによる19-20世紀のハノイ都市形成過程の研究」



Roland Busog Tolentino (フィリピン共和国)。フィリピン大学ディリマン校教授。2007年11月1日～2008年4月30日。「メディア描写とフィリピンの新植民地主義」

◆招へい外国人学者

Paul Close (イギリス)。グローバリゼーションアミティセンター所長・教授。2007年7月1日～2008年6月30日。「ASEAS, ASEAS プラス3および東アジアサミットに関わる東アジア国際関係の挑戦——ヨーロッパ連合との対比において」

◆外国人共同研究者

Dao Minh Truong (ベトナム社会主義共和国)。ベトナム国立大学・天然資源環境研究センター研究員。2007年9月7日～11月29日。「ベトナム北部山地における過去50年間の土地・森林資源と人々の相互作用」

Islam Md. Taufiqul (バングラデシュ)。神戸学院大学アジア太平洋研究センターポストドクトラルフェロー。2007年9月14日～2009年9月13日。「バングラデシュの地方行政制度と『仕事のための食料』計画——貧困削減の加速化のために」

Muniandi Jagadeesan (インド)。タミルナードゥ農科大学農業・農村開発研究センター助手。2007年11月1日～2009年10月31日。「インドにおけるため池灌漑システムの劣化——社会経済的要因とその救済策」



Colloquia

“Spoilers, Provocateurs, Advocates: Muslim-Christian Relations, Islamic Resurgence and Civil Society Dynamics and Their Impact on the Current Mindanao Peace Process”

by Rufa Cagoco-Guiam,
April 26, 2007

The current peace process in Mindanao, in the southern Philippines, between the Moro Islamic Liberation Front (MILF) and the Government of the Republic of the Philippines (GRP) has been proceeding in spurts and pauses and seems to have become interminably protracted. While both GRP and MILF peace panelists claim to have reached substantial levels of agreement on some technical aspects of the negotiations’ “talking points,” current realities point to a much longer, more complicated, and drawn out process. Such realities include, but are not limited to, the effects of three types of “actors” in the peace process: spoilers, provocateurs, and advocates. If the concerns and issues bannered by the first two groups of actors are not addressed judiciously and in a timely manner, Mindanao might see more renewed violence. More significantly, an impasse in the current peace process might exacerbate levels of animosities among the religious and ethnically diverse peoples in the country, thus rendering the region more vulnerable to fresh new rounds of armed strife.

“Assessment of Spatial and Temporal Land Use/Cover Changes in Northern Mountainous Region of Laos Using Satellite Data”

by V.M. Chowdary,
May 21, 2007

Land cover change analysis under different slope categories was carried out for the case study area located in the Northern mountainous region of Laos during the period 1989-2004 using remote sensing data. Two types of land conversion processes – conversion from forest or fallow land to swiddening agriculture or vice versa – were studied in a spatial and temporal context. The study found that the agricultural area in two slope categories, <5° and 5°–10°, showed an increasing trend in all years. For the slope category >10°, an increasing trend was observed until 1992 and a decreasing trend thereafter. A higher rate of deforestation was observed in the slope category >10° during 1989–1993 as compared with 1993–2004. Further, it was found that the fallow period was shortened to less than three years and that nearly 38% of the study area experienced major land transformations.

“Development of Novel Transcription-Reverse Transcription Concerted (TRC) Method for Quantitative Detection of Specific mRNAs of Pathogens and Application to Risk Assessment of Food for *Vibrio parahaemolyticus*”

by Nakaguchi Yoshitsugu,
June 28, 2007

Enteric infection and its close relation to food safety is one of the most important issues affecting human life in Southeast Asian countries. *Vibrio parahaemolyticus* causes seafood-borne gastroenteritis in humans through consumption of seafood contaminated by virulent strains. The presence of virulence genes is usually examined by conventional PCR methods. In risk assessment of food for enteric pathogens, it is very important to assess the contamina-

tion of food by virulent strains. The Transcription-Reverse Transcription Concerted (TRC) method is an easy, rapid, precise, quantitative method that allows the detection of specific mRNAs of virulence genes. This is a possible tool for the quantitative detection of virulent strains of pathogens like *V. parahaemolyticus* in food. Its use will greatly improve the risk assessment of these pathogens in food.

“The Implementation of the PRA (Participatory Rural Appraisal) Method for Sulawesi Rural Development: Reaching the Poor”

by Dorotea Agnes Rampisela,
July 9, 2007

Indonesia’s Development Program never clearly set poverty reduction as a development goal in the first five Pelita (Five Year Development Plan) terms (1969-1993). Only at the start of Pelita VI, in 1994, did the government explicitly identify targets for the reduction of poverty. With the recent decentralization policy, opportunities for a more community-focused approach to poverty reduction have surfaced. One of these approaches is the Participatory Rural Appraisal (PRA) Method, introduced by Robert Chambers, which has been tested in several regions in various programs and seems promising in supporting community-based program implementation in Sulawesi. This presentation outlined the merits and demerits of the PRA Method in the context of its deployment in South Sulawesi and the capacity of this qualitative technique in reaching beneficiaries and supporting quantitative researches.

Visitors' Views

Leisure and Productive Time in Japan



Ikrar Nusa Bhakti

This is my fourth time in Kyoto, but it is the first time I have enjoyed my life in Japan. My previous times here, I went from the Palace Side Hotel to the Center for Southeast Asian Studies (CSEAS), Kyoto University, where I mostly spent my time in the old ASAFAS building which has since been demolished.

As a visiting researcher at CSEAS from July 1 to December 31, 2007, I have had the opportunity to publish six articles on various topics for Indonesian newspapers and a magazine and to complete a paper on ASEAN and a draft of a paper on Aceh.

Because I never had the chance to travel around Japan before, this time I took my family to Tokyo, Osaka, Kobe, Nara, and Hiroshima. They really enjoyed the Midosuji Parade and the fire parade at Kurama. They also enjoyed their time in the rural area close to Professor Mizuno's house. My daughters were very disappointed to see that most places in Nara have become like a modern city. But they were impressed by the Harajuku style of fashion and loved the way the people of Osaka dressed during autumn. I would have taken them to see traditional Japanese puppets at the Bunraku Theater in Osaka, but there was no show during October. It was a good chance for my family to learn about Japanese culture directly in Japan—not only from the “manga,” “anime,” and “game”

they read and saw in Indonesia. They raised the question of whether manga influenced Japanese pop culture or if the reality of young Japanese lives has influenced the stories in manga.

In 2002, we went to the Arizona War Memorial, so this year I took them to Peace Memorial Park and Hall in Hiroshima. Now they have seen the historic places which started and ended the Pacific War. We hate the war!

I hope this is not my last time to be in Kyoto, the most beautiful old city in Japan.

(Visiting Research Fellow)



My Stay in Kyoto



Zhuang Guotu

This year is my lucky year as I was accepted to be a research fellow in this famous institute on Southeast Asian Studies in an excellent university which is so well-known in China. This Center is international, open, and effective, and last but not least, very relaxing for researchers, which can stimulate creative academic thinking. What I will never forget is that the researchers, and particularly the administrative staff, are kind, hospitable, and helpful. Without them, I could not have finished my long paper during my stay.

I am also so lucky to have lived in Kyoto, a very cultural, historical, and beautiful city with a strong academic atmosphere. The half year I spent in Kyoto will be one of the best memories in my life.

Finally, let me express my deep thanks to my counterpart, Professor Okamoto, and to the director, Professor Mizuno, to all their colleagues, and to the staff.

I want to say again and again:

たいへん、お世話になりました、
どうも、ありがとうございます。

(Visiting Research Fellow)



The Richness of Natural and Cultural Heritage in Kyoto



Surithong Srisa-ard

Kyoto has been one of my favorite places ever since I visited briefly in November 2004. I came back as a visiting research fellow at the Center for Southeast Asian Studies (CSEAS), Kyoto University, from March 14 to September 13, 2007. And Kyoto is still for me a most unique place to visit, work, and learn about modern knowledge, local traditional cultures, history, and world heritage sites.

I had the great pleasure of working at the CSEAS library compiling a special bibliography and classifying articles in Thai cremation books in the Charas Collection, one of the special vernacular language collections in the library. The library staff actively collect up-to-date research materials and preserve local cultural information

on Southeast Asia, including publications in Thai, Indonesian, Vietnamese, Burmese, and Tagalog.

The Charas Collection is outstanding for having the largest number of Thai cremation books outside Thailand. Many documents and articles in the cremation volumes, especially of important figures, provide valuable information about the deceased, historical documents, and a selection of articles on a variety of subjects—religion, literature, archeology, medicine, customs and traditions reflecting the actual conditions of Thai life, and local knowledge of Thai society in the past—which are seldom obtainable elsewhere.

I sincerely appreciated the kindness of the Japanese professors and the staff of CSEAS and ASAFAS for providing many opportunities for foreign visiting fellows to experience Japanese local cultures and festivals, to join meetings and seminars, and to take nihon-go class. The spring research trip to learn about the culture and traditions of the Yoshino mountainous area in Nara was my favorite. The Aoi matsuri, Gion matsuri, Obon festival, and Daimonji party were also gorgeous. Visiting old palaces, beautiful gardens, local museums, temples, and shrines was very informative, amazing, and serene; among others, I enjoyed Kiyomizu Temple, Sanzenin Temple, Garden Museum and Hieizan Enryaku-ji Temple, Inari Shrine, and Heian Shrine.

It is hard to believe that my six-month visit has passed like only six weeks. The changing leaves of trees and flowers actually reminds me that time has passed. Every day of my daily experience in Kyoto has been special and unforgettable. I just hope I will have a chance to come back again.

(Visiting Research Fellow)



Walking Kyoto's Hills



Eric Tagliacozzo

I felt very lucky to be offered a Visiting Fellowship at Kyoto, as free time is hard to come by in my job back in America. I very much wanted to have some peace and quiet to read and write, especially toward the completion of a new book. Though my family, which includes two very small children, were with me during most of my stay in Kyoto, for the first few weeks they were not, so I took advantage of this to go for very long walks at sunset through Kyoto's hills. I don't usually get much free time to do things such as this anymore, so I tried to make the most of it, after I came home from a day's work at the Center.

It's hard to believe that Kyoto is one of the largest cities in Japan, which is in turn one of the world's most industrialized countries. You would never know this from the hill routes that I took every day, walking in the north-eastern parts of the city near where I live. My routes always started near Shugakuin, but then wandered aimlessly up (and up and up) through the hills in the direction of Lake Biwa, which is on the other side of these heights. Every night for several weeks I walked and walked, coming across small lanes and houses, beautiful trees and temples, and many small rice fields where the color of green was so intense that it literally took my breath away. All of this in the hills overlooking a huge

city! It's really hard to believe that this can be true, but then perhaps the Kyoto Environmental Summit chose this place for good reasons

People seem to have very little space in Kyoto, but they use the space that they have in beautiful ways — one's daily existence is manicured here, not just one's gardens. There is an economy of effort in moving from one place to another, because things have been set down so well, and you can move from one beautiful little corner to another with a minimum of fuss and spent energy. I came home bathed in sweat from these August walks, but I always felt healthy and happy — nearly every time, I felt a great sense of beauty from these little journeys. On one of the last nights that I was alone in Kyoto, a small pack of deer appeared out of nowhere, startling me but also rooting me to the ground in wonder. That was an evening when there were diamonds in the sky, and the hemisphere had already turned pink, and I will remember it for a long time to come.

(Visiting Research Fellow)

来訪者

2007年5月2日 Win Pe (元マングレー芸術学校長・映画監督) 他6名 ▼5月8日 P.C.Close (グローバルイノベーションアミティセンター所長) ▼8月3日 Byoung Joo Hah (釜山外国語大学校所長) ▼10月5日 Wiwut Tanthapanichakoon (国立ナノテクノロジーセンター所長・タイ京大同窓会会長) ▼10月25日 Park Eun-Hong (聖公会大学校 NGO リソースセンター所長) ▼10月29日 Abdul Rashid Abdullah (マレーシアサラワク大学学長) 他6名 ▼10月31日 Pannee Panyawattanaporn (NRCT 国際交流課課長) 他2名 ▼11月5日 Said Karim (アル・カウサー・アル・ハイラット寄宿塾校長) 他11名

手足の急速な脱力と麻痺

清水 展

7月の末に1週間ほど、インドネシアに出かけました。ジョグジャカルタ近郊のゲシアン村で研究所が協力して整備した防災拠点の開所式に参加し、現地の活動を見聞する目的でした。出かける数日前から、手足の先がしびれて力が入りにくい状態になりました。何か変だなと思いつつ、さして気にもしませんでした。ところが現地の滞在中にだんだんと症状がひどくなりました。足が思うように動かず、せいぜい10か20メートルを歩くのがやっと。階段は上がれなくなり、ペンを持ってても力が入らず字が書けず、ワープロが打てず、韓国料理店の鉄の箸が重くてうまく使えませんでした。衣服のボタンかけ、トイレの尻ふき、何から何まで不自由しました。帰国の際には、空港で車椅子のお世話になりました。スーツケースは家にたどりつくまで、人に助けてもらって運びました。

でも事態の深刻さをよく理解せず、帰国して診療に出かけた先は鍼灸医院でした。以前、ギックリ腰になって、2、3日まったく動けなくなったとき、鍼灸治療がよく効いたので、また今回も、と考えた次第です。ところが、治療の効き目がまったくなく、ますます悪くなってゆきました。でも熱はなく、食欲はあり、手足以外には何の問題もありませんでした。何か変だなあと思い、でも病院に行

くにしても何科に行ったらよいか見当がつかず、そこで松林先生にメールで相談しました。先生は折り返しの電話で、神経内科に行くのが良いでしょうと助言してくださいました。

さっそく翌日、京大病院に出かけたところ、そのまま検査入院となりました。検査の結果は、ギランバレー症候群という難しい名前の病気でした。握力計で測ったら、両手ともに2キロしかありませんでした。力が入らないのは実感してましたが、そんなに弱くなっているとは思いませんでした。自分でもビックリしました。担当医の説明では、体内に入り込んだ細菌に対する免疫活動が、自身の手足の抹消神経を攻撃してしまった

ことにより引き起こされたそうです。思い当たることといえば、発症の前に焼き鳥屋で痛飲し、翌日にひどい下痢をしたことです。

深刻な場合には、自律神経を冒され、呼吸困難となって集中治療室のお世話になる必要があるとのことでした。急に心配になりましたが、入院した頃が最悪で、2、3日集中的に検査をしている間に、少しずつ軽快のきざしが見えてきました。結局、生まれて初めての入院生活を2週間あまり送りました。退院後は、早寝早起きを心がけ、リハビリのつもりで毎朝散歩をしています。病気になる前よりも健康的な生活をするようになりました。(研究所教授)



ゲシアン村の有力者宅のポーチで村人たちと防災について語る

ギランバレー症候群 Guillan Barre Syndrome: GBS

松林公蔵

清水さんから、貴重な病歴をご報告いただきましたので、若干のコメントをさせていただきます、みなさまの共有知となればと存じます。

一般に神経疾患には、適切に診断治療が行われれば、1.完全に治癒する疾病、2.回復の予後には運不運が介在する疾病、3.診断が適切でも根治できない疾病にわけられます。3の代表としては前回紹介しましたALSやアルツハイマー病など、2としては髄膜脳炎や熱帯熱マラリアなどがありますが、ギランバレー症候群（以下GBSと略）は典型的な1の疾患に属します。

GBSは、感冒症状や下痢を契機に、その数日後から下肢に始まりやがて上肢へと上行する筋肉の脱力の特徴とする疾病です。症状は1週間から10日くらいまで徐々に進行し、ひとたび極期に達すると、あとは自然に緩解治癒してゆく特徴があります。

人によっては、極期では、呼吸筋の麻痺がきて人口呼吸器を必要とする場合もあり得ますので、GBSを疑った場合は、必ず入院していただき、最悪の時期に備えます。

通常の内科医師はあまり診た事がない疾患と思われるので、なかなか診断がつかない場合も多いのですが、神経専門医であれば、特徴的な病歴と診察所見として、上肢と下肢のすべての腱反射（たとえば、膝の腱をハンマーで叩くと下肢がピクッと伸展する）が消失しておりますので、診断は比較的容易です。脊髄液の成分で蛋白質が増えておれば、ほぼ確定的といえます。神経の伝導速度を計ればより確実です。病気の機序として患者さんには「全身の末梢神経が風邪をひいたような状態」と説明いたしますが、何らかの菌に対する免疫反応が末梢神経におこり麻痺をひきおこすと考えられております。ガンマーグロブリ

ンという薬の連日注射は、症状の進行をくい止め回復を早めますのでしばしば重症例には用いますが、薬剤がとても高価であること、副作用もあることから、患者さんやご家族とケースバイケースでご相談いたします。清水さんの場合、京大病院に入院された頃にはすでに最悪の時期を脱しており回復途上にありましたので、結局、自然治癒となりました。

誰でもこの病気になる可能性はありますので、もしも海外などで、同様の症状を経験された場合は、担当医師に『ギランバレーではなかるうか?』と問えば、担当医もはたと気づいて教科書を読みなおし、神経専門医を紹介してくれると思いますので、この病名を記憶しておく価値はあるかと思われま

(研究所教授)



出版ニュース

◆『東南アジア研究』45 巻1号

Southeast Asian Studies 45(1)

< インドネシア政治への新たな視座 >

「序——インドネシア政治をどう考えるか」白石隆▼「ユドヨノ大統領と民主化『第二フェーズ』——政治改革・紛争後復興・首長選挙を中心に」本名純▼「乗っ取られた同化政策——スハルト体制の内務省と対華人政策」相沢伸広▼「ポスト・スハルト時代のインドネシア国会議員——2004年総選挙後の変化と連続性」森下明子▼「インドネシアのイスラム化と政治家——1999, 2004年選出の地方議員プロフィールから」見市建▼「ポスト・スハルト期における政治経済——リアウ州における政府間対立, 1998-2004年」ワフユ・プラスティヤワン▼「自治体新設運動と青年のポリティクス——ゴロンタロ新州設立運動 (1998年～2000年) に焦点を当てて」岡本正明

◆『東南アジア研究』45 巻2号

Southeast Asian Studies 45(2)

「インドネシアにおける村落会議と村落議会——植民地期20世紀初頭における村落集会の形成と村落協議会の試み」水野広祐▼「北部ヴェトナム紅河平原における輪中型堤防形成に関する試論」西村昌也▼「シンガポールにおける住宅団地再開発に関する一試論」鍋倉聰▼Impacts and Constraints of Universal Coverage in Thailand's Public Health: A Survey Study in the Northeast Region.

Chalernpol Chamchan. ▽ 書評 (Book Reviews) Reed L. Wadley, ed. *Histories of the Borneo Environment: Economic, Political and Social Dimensions of Change and Continuity*. 市川昌広▼David Henley. *Fertility Food and Fever: Population, Economy and Environment in North and Central Sulawesi, 1600-1930*. Wil De Jong ▼Adrian C Sleight et al., eds. *Population Dynamics and Infectious Diseases in Asia*. 吉川みな子▽現地通信 (Field Report) 「停年前後のフィールドワーク」山田勇

◆研究報告書シリーズ Research Report Series

No. 115. *The Thai Coup d' etat and Post-Authoritarian Southeast Asia: The Shifting Balance of Social Powers*.

No. 116. Mizuno Kosuke, Indrasari Tjandraningsih, and Rina Herawati Erawati. *Direktori Serikat Pekerja/Serikat Buruh Indonesia*. AKATIGA Pusat Analisis Sosial.

◆Bibliography Series

No. 2 Surithong Srisa-ard. *Articles of Thai Cremation Books in the Center for Southeast Asian Studies Library Kyoto University*.

Kyoto Review of Southeast Asia No.8/9

<http://kyotoreviewsea.org/>

Kyoto Review of Southeast Asia posted a double issue on culture (No. 8/9, March/October 2007). It features essays



on Philippine and Thai literature, modern Malaysian Islamic music and colonial Indonesian musical culture, Indonesian museums, theater collaboration between Japan and Southeast Asia, and Japanese pop culture. It includes short book reviews, essays on Indonesian Muslim intellectuals and Malay culture in southern Thailand, and reprints by a noted Thai academic, a controversial Thai essayist, and a highly-respected Filipina nun-activist. This issue also

invites you to listen to a speech given by Prof. Benedict Anderson at the launch of the Philippine edition of his *Imagined Communities*. And the latest feature of the e-journal is the addition of video; in this issue the Filipino film makers *Moving Images* have permitted us to upload their *Kuaresma*, a documentary about the celebration of Holy Week in the Philippines.

(Reported by Patricio N. Abinales)

研究会報告

◆ Special Seminar

U Sai Aung Tun (Vice Chairman, Myanmar Historical Commission) “Traditional Culture in the Creation of Contemporary Myanmar,” April 21. ▼ Endy M. Bayuni (Chief Editor of the Jakarta Post) “Politics and Role of Mass Media in Post-Authoritarian Indonesia,” April 22. ▼ Kovit Khampitak (Visiting Research Fellow, CSEAS) “The Situation of Elderly People in Thailand,” May 17. ▼ Rampisela A. Dorotea (Visiting Research Fellow, CSEAS) “Dam Development: Solving or Creating Problems Study Case — Bili-bili Dam Issues and Facts,” June 15. ▼ Lye Tuck-Po (Visiting Research Fellow, CSEAS) “New Knowledges, Old Problems: Resource Management along the Stueng Saen (Saen River), Kampong Thom Province, Central Cambodia,” June 25. ▼ Khin Lay Swe (Visiting Research Fellow, CSEAS) “Cropping Systems and Agricultural Implements in Different Regions of Myanmar,” September 25. ▼ 福井捷朗 (立命館アジア太平洋大学・京都大学名誉教授) 「タムノップ研究——その後の展開」10月13日 ▼ Zhuang Guotu (Visiting Research Fellow, CSEAS) “Forth Wave: Chinese Migration into Southeast Asia in the Last 20 Years: On the Context of Labor and Capital Flowing in China and ASEAN,” October 18.

◆ 拠点大学交流事業特別セミナー

プロジェクト8「変貌する『家族』」主催
10月16日 Chalong Soontravanich (Chulalongkorn University) “‘Family’ during Sarit’s Regime, 1958-1962: Crime and Castration, Child and Family Welfare and ‘Mistresses’”

◆ 「地域情報学」研究会

(CSEAS, 基盤研究 (S) 「地域情報学の創出」共催)
5月22日 桜井由躬雄 (東京大学名誉教授) 「19-20世紀ハノイ都市形成の

4D-GIS分析」▼10月12日 「地域研究のためのGoogle Earthと時空間解析ツール」Howie Lan “Google Earth, Introduction and Applications” ▼ S. Hara and T. Sekino “Introduction and Demo of Geo-temporal Tools”

◆ 「国家・市場・共同体」研究会

7月6日 岡江恭史 (農林水産省農林水産政策研究所) 「ベトナム紅河デルタにおける人口移動と農家経済——ハイズオン農村の事例」

◆ 「アジアの政治・経済・歴史」研究会

第1回:7月30日 Roy Bin Wong (Director, Asia Center, UCLA) “Public Finance in East Asia: National, Regional and Global Perspectives” ▼ 第2回:12月18日 George Bryan Souza (Professor, University of Texas, San Antonio) “An Anatomy of Commerce and Consumption: Merchants and Opium at Batavia over the Long Eighteenth Century” ▼ Eric S. Tagliacozzo (Professor, Cornell University and CSEAS) “Opium Smuggling in Island Southeast Asia during the Long Nineteenth Century”

◆ 「東南アジアの社会と文化」研究会

第33回例会:9月21日 飯國有佳子 (国立民族学博物館) 「東南アジアにおける宗教とジェンダー研究の再考——ビルマにおける宗教実践の事例から」

◆ 「次世代の地域研究」研究会

第4回:7月21日 牧野元紀 (国立公文書館アジア歴史資料センター) 「阮朝ベトナム明命期におけるキリスト教社会の変容——地方官の禁教令執行とトンキンのカトリックコミュニティ」▼ 笹川秀夫 (立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部) 「植民地期のカンボジアにおける対仏教政策と仏教界の反応」 コメントーター:林行夫 (CIAS)

◆ 「比較の中の東南アジア」研究会

第1回例会:5月31日 Frankil S. Notosudirdjo (Visual and Performing Arts Department of Humanities, University of Toronto) “The Japanese Influence on Music, Politics, and Nationalism in Indonesia:1930s-1950s” ▼第2回例会:6月29日 (共催:東南アジア学会) 中山三照 (大阪観光大学観光学研究所) 「公的補助金に頼らない社会事業の実現——タイにおける華人系慈善団体の緊急医療・支援活動の事例から」 コメントーター:相沢伸広 (アジア経済研究所)

◆ 「映像なんでも観る会」研究会

第10回:4月27日 「マレーシア映画のニューウェーブ」監督:ヤスミン・アーマド 『細い目 (Sepet)』(2004) 『グブラ (Gubra)』(2005) コメントーター:山本博之 (CIAS) ▼第11回:5月29日 「女性性器手術」監督:ウスマン・センベヌ 『母たちの村』(2004) ▼監督:プラティバ・パーマー 『戦士の刻印:女性性器切除の真実』(1998) コメントーター:岡真理 (京都大学) ▼第12回:7月4日 監督:佐藤真 『SELF AND OTHERS』(2000) 『花子』(2001) ▼第13回:7月20日 (共催:京都フィリピンフォーラム) 監督:リノ・プロッカ 『Macho Dancer』(1988) ▼第14回:10月11日 (共催:スマトラ沖地震・津波 災害対応過程研究会) 監督:Aryo Danusiri 『象の間で戯れる (Playing Between Elephants)』(2007) 司会:石井正子 (大阪大学) パネリスト:Aryo Danusiri (Executive Director of Ragam, NGO for Multi-cultural Media), 高松幸司 (ジャパンプラットフォーム(JPF)事務局長), 山本博之 (CIAS), 西芳実 (東京大学)

◆ 「地域研究アーカイブ」研究会

第4回:10月12日 高谷好一 (京都大学名誉教授・聖泉大学) 「地域研究から自分学へ」

◆ 「東南アジアの自然と農業」研究会

第131回例会：6月22日（共催：山地研究会）中辻 享（福島大学）「ラオスにおける高地民の移住と生計戦略」▼第132回例会：10月19日 山本宗太（京都大学）「台湾原住民およびバタン諸島におけるキダチトウガラシの呼称・利用方法」

◆「インドにおける労働集約型経済発展と労働・生活の質に関する研究」研究会（共催：龍谷大学アフラシア平和開発センター第2班）

第4回例会：6月24日 田中耕司（CIAS）『労働集約型工業化』以前—近世と近代を架橋する農業』コメンテーター：柳沢悠（千葉大学）、河村能夫（龍谷大学）▽中村尚司（龍谷大学）「水利用をめぐる開発と紛争—南インドを中心に」コメンテーター：脇村孝平（大阪市立大学）、水野広祐（CSEAS）▽杉原薫（CSEAS）「生存基盤確保型の発展と私的所有権—方法論的覚書」

◆「農村開発における地域性」研究会

第18回例会：5月28日 奥山直司（高野山大学）「ベンガル仏教史に関する一考察—バングラデシュの遺跡と遺物を手掛かりに」▽安藤和雄（CSEAS）「ベンガル仏教世界が伝える古代農業における技術変化と伝播」

◆「バンコク・タイ研究会」

第22回例会：7月28日 平松秀樹（チューラーロンコーン大学／大阪外国語大学）「タイ現代文学と環境」▽市川光太郎（京都大学）「音響でジュゴンを探す」▼第23回例会：8月13日 秋庭孝之（チューラーロンコーン大学）「グローバルイゼーションと経済危機後の

タイ映画」▽安田十也（京都大学）「無人島でタイ国海軍とウミガメを探す」▼第24回例会：8月17日 Sebastien Roux (Paris 13 University; IRASEC) “Desires and Feelings in Tourist-oriented Prostitution. Lessons from the Field” ▼第25回例会：10月25日 川澄厚志（東洋大学）「タイの都市スラムにおける小規模住民組織を通じたコミュニティ開発に関する研究」▽吉田圭助（東洋大学）「タイの都市貧困層におけるコミュニティ開発と社会移動に関する研究」

◆「防災教育・自然災害復興支援のための地域研究を目指して—コミットメントの経験から」科研報告会

「自然災害被災地をつなぐ地域研究の試み—スラウエシ→ジョグジャカルタ」7月5日 山本博之（CIAS）「趣旨説明」▽浜元聡子（CSEAS）「ジャワ地震復興支援と地域研究—プカランガン（屋敷林）計画がめざすもの」▽星川圭介（CSEAS）「山地崩壊と地震—2つの被災地における復興の現状と課題」▼10月3日 堤内隆広（京都大学）「ジョグジャカルタおよびアチェにおける防災教育活動報告」▽山本博之（CIAS）「トラウマケアとしての防災教育—2007年9月12日スマトラ島南西沖地震被災状況報告」

◆「大陸部新時代」研究会

第1回：11月3～4日 【11月3日】神田真紀子（東京大学）「保護領政権下のベトナム人リクルートについての一考察」▽山田裕史（上智大学）「カンボジア人民党による『一党支配型』権威主義体制の構築—パリ

和平協定後の『国家政党』への変容」▽松井生子（広島大学）「カンボジアの地方権力とベトナム人—Prey Veng 州 Peam Chor 郡 B 村の事例から」▽朝日由実子（上智大学）「カンボジアにおける伝統染織関連産業の興隆—消費社会化、グローバル化による影響を中心として」▽正楽藍（神戸大学）「カンボジアの教育発展—基礎教育拡充と学校教育をめぐる諸課題」【11月4日】小林知（CSEAS）「再生から変容へ—ポル・ポト時代以後のカンボジア農村社会の復興について」▽堀美菜（東京大学）「トンレサープ湖における小規模漁業の役割—コンポントム州とコンポントチュナン州の事例」▽柳星口（上智大学）「カンボジアにおける漁業紛争と漁業改革—1990年代以降のトンレ・サープ湖地域の事例を中心として」▽野口博史（南山大学）「カンボジア歴史地域調査報告—調査概念と方法論を中心として、2004～2007年」

◆ API Seminar

October 31.
A) Current Developments in Philippine Cinema: With a Special Focus on the Rise of Philippine Independent Films
B) Screenings and Discussion of the Award-winning Filipino Short Films
Moderator: Tanaka Koji (CIAS)
Speaker: Edward Paciano Cabagnot (CCP Media Arts, Cultural Center of the Philippines)

「稲盛財団記念館」建設工事、順調に進む



2007年8月、川端沿いの北棟と南棟が取り壊された。現在、基礎工事が順調に進捗しており、2008年10月中には、地上3階建て6,000平方メートルの稲森財団記念館が竣工の予定である。

2007年12月1日発行

発行 〒606-8501
京都市左京区吉田下阿達町46
京都大学東南アジア研究所
Tel. 075-753-7344
Fax. 075-753-7356
<http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp>

編集 岡本正明・米沢真理子